

日本人の宗教意識

－ その発現と展開 －

小 嶋 善 行
大 洋 和 俊

<第一部>

キリシタン迫害と殉教について

位階を嫌い、万民司祭を旨とするプロテスタント諸教会が極めて批判的であることは容易に想像がつくが、カトリック教会では、生前の徳行が極めて高く、殉教やその他の英雄的行為により、死後その秀逸な聖性を教皇が公にかつ正式に承認する尊称として3つの位階がある。即ち、尊者、その上に福者、そしてその上に聖人がある。教皇がこれらの尊称のいずれかを承認する前には、その者の生存中の聖徳、その者の伝達によって奇跡が行われたか等々の周到で慎重な調査が、教皇庁列聖省の様々な委員会で徹底的に行われることになっている。聖人の列に加えるためにカトリック教会が行う儀式は列聖式と呼ばれ、福者に加える儀式は列福式と呼ばれる。列福式は地元で行うことも認められているが、列聖式は教皇庁で行われなければならないという決まりがある。

ところで、日本におけるこれまでの列聖、列福の例を見てみると、1597年2月に長崎の西坂で殉教した「日本26聖人」については、1627年と29年の2回に亘ってまず列福式が行われたのだが、迫害の厳しいこの時期の列福式は当然ながら日本の地元で行うことはできず、ローマで行われたのである。この後これら26福者はさらに聖人に推挙され、1862年6月8日にやはりローマにおいて列聖式が執り行われ、日本人としては初めて聖人の列に加えられたのである。⁽³⁾次に、1617年から1632年までの殉教者のうち、いわゆる「元和の大殉教」で殉教した55人を含む205人については、1867年に時の教皇ピオ9世により「日本205福者」と正式に命名されてローマで列福された。さらに1633年から37年までの長崎における16人の殉教者は、1981年に教皇ヨハネ・パウロ2世により「長崎16福者」と命名されて、やはりローマにおいて列福されたのであるが、6年後の1987年には「聖トマス西と15殉教者」と改名されて列聖されるに至ったのである。日本人としては2回目の列聖ということになる。この他、第2次世界大戦中、しばらく長崎に滞在していたポーランド出身のkolbe神父はアウシュビッツで一人の同胞のために命を差し出した人だが、戦後「聖マクシミリアノ・マリア・kolbe」と命名されて列聖されている。⁽⁵⁾

さて、バチカンの教皇庁国務省は、1603年から1639年までに日本全国各地で殉教した188人の信者を「ペトロ岐部と187殉教者」と命名して、2008年11月24日に長崎市で列福式を執り行うと発表した。これまで日本の列聖、列福運動はことごとく修道会などが進めてきたものだったが、この列福運動は日本の教会が主導して進めてきたという点で意義深いものであった。しかも、地元日本で列福式

が行われたのは今回が初めてのことである。列福式そのものは教皇庁が主催するものであり、教皇ベネディクト16世はこの列福式のミサ司式のために列聖省長官を特使として任命した。特使は教皇の名代としてミサを執り行い、教皇教令を読み上げて公に列福を宣言したのである。

さて、この度列福された188人の殉教者のうち183人は男女の平信徒であり、残り5人は司祭あるいは修道士であった。ペトロ岐部はローマで司祭になり、帰国後、江戸で殉教した新福者である。残り187福者のうち駿府で迫害を受け、やはり江戸で殉教した信者が一人いる。その名をジョアンはらもんど原主水という。おたあジュリアを初め、駿府で迫害を受け殉教した信者は何人もいるが、この度列福された殉教者の中ではこの原主水一人ということなので、少し詳しく見てみたい。原主水については、「静岡キリシタン文化研究会」第10回例会でH. チースリク師が詳細に発表されているので、それを参照にさせていただく。⁽⁶⁾なお、「江戸の大殉教」については、『切支丹迫害史中の人物事蹟』（姉崎正治著作集第4巻）、『日本キリシタン殉教史』（片岡弥吉著）などの殉教史にも詳しく述べられている。

原主水たねのぶ胤信は下総（千葉県）白井の城番の子に生まれた。1590年、父胤成たねよしは北条氏に味方して小田原の合戦に参戦したが、秀吉に敗れて江戸で切腹して果てた。小田原の合戦の後、家康が関東8カ国の領主になった時、北条方武将の子弟を多く召し抱えたが、父を亡くした幼少の主水も、その時家康の小姓組の一人となった。主水は最初、伏見（京都）の徳川屋敷にいたが、1600年に教会の門をくぐり、大坂でモレホン神父から受洗してジョアン（ヨハネ）と名乗った。1603年、彼は20歳で走衆はしりしゅう（将軍警護役）30人の組頭に抜擢され、1500石を賜ることになる。彼は翌年21歳の時、フランシスコ会の第3会員として「帯の組」に入っている。⁽⁷⁾1607年には家康に従い駿府に移り、駿府城の御裏御門の警護の役に就いている。「背高くして勇猛な武士」であった原主水の順風満帆の人生は、前途洋々たるもののよう思えた。しかし、ここでそれを根底から覆す大きな事件が起こることになる。⁽⁸⁾

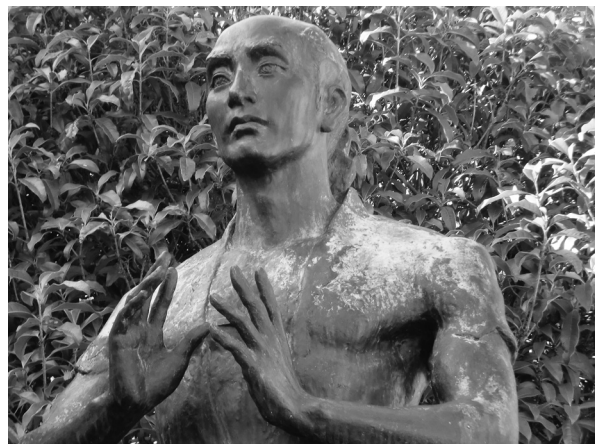
肥前（長崎）日野江城主有馬晴信は、有馬氏の旧領地であった諫早の返還を求めて幕府に訴えた時、この問題を取り扱ったのは幕老の一人本多正純であった。この折に、正純の部下パウロ岡本大八が公文書を偽造して贈収賄事件に発展した。これが露頭し、岡本大八は逮捕され、1612年3月25日に安倍川原の刑場で火刑になった。⁽⁹⁾ところで、イエズス会のデ・アンジェリス神父が建てた駿府の教会はたまたま大八の名義になっていたもので、この事件は直ちに駿府キリシタン弾圧へとエスカレートしてしまった。元々キリスト教に不信を抱いていた家康は、地元駿府の武士に対して宗門改めを命じ、家中のキリシタン武士14人を改易して追放したのである。しかしこの時、主水は出奔し逃亡生活を送っていた。主水には恋仲の女性がいた。家康の直臣野尻彦太郎の妹であったが、彼女は斬首、彦太郎は逼塞ひっそくという処分となった。逃亡中かくまった者たちも斬首という厳しい処分を受けている。結局、2年後の1614年に主水は捕えられ、10月16日に安倍川原で額に十字架の焼印を押され、両手の指を切断され、さらに両腿の筋を切り落とされた。夜になってからやっとキリシタンたちが駆けつけて、彼を近くにあったハンセン病者の小屋に運び込み、手当をし、傷を洗い、介抱した。⁽¹²⁾結果、主水はどうか一命を取り留めた。

その後、主水はいざりながら江戸に向かい、浅草のハンセン病者の中に潜伏し、「帯の組」を作って信仰生活を守っていた貧しい信者たちの中心人物になっていた。同じころ、デ・アンジェリス神父はレオ竹屋権七というキリシタン武士の家に、そして東北での宣教から戻ったフランシスコ会のガルベス神父は鎌倉でヒラリオ孫左衛門という者の家に隠れていた。⁽¹³⁾

1623年、かつて主水に仕えていた召使いが賭事に凝り、身動きがとれなくなっていたが、当時キリシタンにかけられていた銀300枚の賞金に目が眩み、神父たちの隠れ場所や江戸の主だったキリシタンの名簿を持って、北町奉行米津勘兵衛田政に密告したのである。デ・アンジェリス神父と修道士シモン円甫は、⁽¹⁴⁾このことを聞いて一旦は逃げたが、他の信者たちを危険にさらさないため、自ら奉行所に出頭した。一方、江戸でキリシタン捜索が始まったことを聞いた孫左衛門は、ガルベス神父を逃がすため一隻の小舟を雇った。しかし、舟主は金を持ち逃げしてしまい、ガルベス神父は鎌倉海岸で、孫左衛門も家族と共に捕えられ、江戸に送られた。結局、原主水ら総数50人のキリシタンが逮捕され、小伝馬町の牢に入れられた。

丁度その頃、江戸には三代將軍家光の就任を祝うために全国から諸大名が集まっていた。家光は自らの威信と断固たるキリシタン禁令を誇示するため、捕らわれ人を諸大名の前で火刑に処するよう指示した。刑場は諸国から江戸に集まる往来の人々への見せしめのため、東海道に面した江戸への入口に当たる札の辻が選ばれた。⁽¹⁵⁾

1623年12月4日、小伝馬町の牢を出た50人のキリシタンたちは、江戸でも往来の最も激しい京橋、銀座、新橋、芝を通して引回され、札の辻に連行された。キリシタンたちは3つの組に分けられた。先頭の組は、デ・アンジェリス神父が馬に乗せられて先頭に立ち、それに15人が徒歩で従った。次の組の先頭は馬上のガルベス神父で、それに16人が続いた。最後の組は、これも馬上の原主水が先頭で、残りのキリシタンはすべてこの組に入れられた。これらの人々は皆、おびたしい群衆の前で火に焼かれ殉教を遂げた。以上がいわゆる「江戸の大殉教」の顛末であるが、馬上の3人のうち、2人の神父とシモン円甫は既に福者に列福されている。この度の列福式でようやく原主水が福者の列に加えられたのである。⁽¹⁶⁾



(カトリック静岡教会にある小坂圭二氏作による原主水立像：筆者撮影)

さて、カトリック静岡教会キリシタン文化研究会は、『駿府キリシタン殉教之碑』建立の由来について」という1枚のプリントを発行したが、その「むすび」に静岡新聞社の基礎作りに貢献した徳富蘇峰の殉教キリシタンへの賛辞を載せている。これは蘇峰の大著『近世日本国民史』からの引用であるが、筆者も同様にこの引用をもって拙稿の「むすび」としたい。

「当時、日本人の流した血は海の如く、
川の如く、淵の如く、池の如くあったに
もせよ、その中にて純潔な血は、この殉
教者の血だ。耶蘇教徒の迫害は決して日
本歴史の誇ではない。しかもこの迫害に
屈せずして流した日本人の血は日本歴史
の光である。日本国民の誉である。」

注

- (1) プロテスタント教会では、殉教者を教会で公認するという規定はない。
- (2) 例えば、生前ノーベル平和賞を授与されたマザー・テレサは、殉教者ではなかったが、故人となってから教皇庁の詳しい法規手続調査を経て、2003年10月19日に教皇ヨハネ・パウロ2世より福者の尊称を得ている。聖人に格上げしてほしいという声があちこちで上がっていると聞くと、カトリック教会では、尊者、福者、聖人の3位階のうち、聖人に対してのみ教会暦にその祝日を定め、その功德が信徒の救いに有効と認め、崇敬の対象となっているからである。
- (3) 教皇ピオ9世は、1861年にフランシスコ会士ら23名を、翌年イエズス会士3名を列聖した。
- (4) 1622年（元和8年）9月10日、長崎の西坂で、神父や修道士、老幼男女のキリシタン55人が殉教した。イエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会の神父9人を含み修道士、信徒を合わせ25人は火刑、31人は斬首となった（実際には56人が殺されたが、1人は転んだと疑われ、殉教者として記録されていない）。
- (5) コンベンツァル聖フランシスコ会の神父で1930年に来日し、長崎で聖母の騎士修道院を設立した。1936年に故国ポーランドに戻るが、1941年にナチス批判の出版をしたという理由で逮捕された。
- (6) 『静岡キリシタン文化研究会会報』第6号 P.11参照。
- (7) ペドロ・モレホンはイエズス会神父で、『日本殉教録』の著者。
- (8) フランシスコ会開祖であるアシジのフランシスコに倣い、帯を身に纏って修業をしたり、伝道や慈善・救済活動で平信徒（第3会）が互いに絆を強めた組織。因に、第1会は修道士、第2会は観想修道女の会である。
- (9) 岡本大八がいつ受洗したかは不明であるが、教会の資料には信者として記録されている。彼は、家康の下で駿河の総奉行職にあった本多正純の有力な部下であり、しかも顧問でもあって、駿府

において大きな力を持っていたようである。贈収賄問題では、有馬晴信と対決することになり、後に晴信も罪を被って斬首されている。

- (10) ジェロニモ・デ・アンジェリス (1568～1623) はイタリア出身のイエズス会神父で1602年に来日した。駿府に初めて教会を建て、計画的な布教活動を始め、後に原主水らと共に江戸で殉教する等、駿府との関係が深い。また、2回に亘り蝦夷地を探索して地図を作成した。
- (11) ジョアン原主水、ディエゴ小笠原権之丞、榊原嘉兵衛、西郷宗三郎、湯座伝三郎、山下庄三郎、ヨアキム梶十兵衛、バルトロメオ梶市之助、横地長五郎、吉田武兵衛、小野庄蔵、須賀久兵衛、山田次左衛門、水野二左衛門の14人 (『静岡キリシタン文化研究会会報』第1号 P.8参照)。
- (12) 当時、駿府には少なくとも2カ所にこのような小屋があり、安倍川畔に数人、江尻の巴川畔には6人のキリシタンのハンセン病者がいた。江尻の6人については洗礼名が伝わっているが、安倍川原の数名については分かっていない。
- (13) フランシスコ会のフランシスコ・ガルベス神父は、同会の長上の命により東北地方に派遣され最上地方の宣教に携わっていたが、1623年、長上が病気に倒れたため江戸に呼び戻された。
- (14) シモン円甫はデ・アンジェリス神父の許可を得て獄中で修道誓願を立て、イエズス会士となった。彼は獄中で40人の囚人を感化して洗礼を授けたと伝えられている (『切支丹迫害史中の人物事蹟』姉崎正治著作集 第4巻 P.379参照)。
- (15) 現在の田町9丁目。当時、東海道の片側は海に面しており、町門の前に制札場があったので「札の辻」と呼ばれていた。今回の処刑では通常の浅草の刑場でなく、往来の盛んな東海道に面したこの場所を選んだのである。
- (16) 1867年、教皇ピオ9世により「日本205福者」が列福された時、デ・アンジェリス神父、ガルベス神父、シモン円甫の3人は福者となったが、不幸にも修道会の調査が進んでいなかった原主水以下は外された。

(小嶋善行)

【第二部】

1 生月島の殉教

佐世保から松浦鉄道に乗り換え、田平 (たびら) で下車する。日本のどこにでも見られる小さく、ひなびた駅舎である。日本最西端の駅の文字が目を引きつける。駅前の坂を下り、平戸口棧橋から平戸棧橋へバスで移動。そこから揺られること一時間のところに、西玄可^{にしげん か}の殉教の地、「ガスパル様」はある。わずかに人家はあるものの、畑の中にある停留所から細い小道を登ったところに突如見えてくる巨大な塔がそれである。西家の先祖代々の墓地である黒瀬の辻は丁度、その裏側で林の中にひっそりと祀られ、彼もそこで斬首されたという。

遠くに、生月島最大の殉教の地といわれる中江の島が見える。ジョアン坂本やダミアン出口をはじめ、老いた母、小さな女の子が次々に斬首された島である。まだ日暮れには早い時間であったが、

中江の島は灰色の雲が低く垂れこめている海上に、うずくまるように黒い陰を落とす。

自分だけでなく、家族を伴っての「殉教」とは何か。その課題を中江の島は見る者に突き付けている。

キリスト教の信仰や道徳を捨てるよりも、苦しみや死を選んで信仰の証しをすること。(中略) 殉教の条件は次の通りである。①生命の犠牲。すなわち処刑による流血の殉教、あるいは餓死、牢死、拷問や追放の苦難などによる無血の殉教。②死を甘んじて受ける、すなわち無抵抗な死。したがって十字軍の戦死者、あるいは島原の乱の犠牲者などは殉教者として認められない。(中略) 教会では殉教を、信仰の証しと十字架上のキリストに対する最高の愛の実行としてみている。(以下略)⁽¹⁾ (『日本キリスト教歴史大事典』教文館、667頁)

平戸市生月島における信仰の証しは、上記の説明に合致する。特に注目される点は、殉教が「島」でなされたこと、海を臨む場所で行われたことであろう。生月島、中江の島は海を隔てての場所であり、地理上の距離というよりも、心理上の問題として「島」なる名の付く場所と追放排除、死の問題は深く結合しているように思われる。「島」は地上と天上、仏教でいえば此岸と浄土との結界のごとき場所と見なされていたかとも思う。

生月島ガスパル様をあとに、小高い岡をくだってあたりを見ると、そこは「南無阿弥陀佛」の名号が刻まれている墓群であった。キリスト教殉教の地と、浄土真宗の墓群がまるで背中合わせのように混在している場所。西玄可が先祖代々の墓地、黒瀬の辻に葬られたのと符合するかのようになり、日本人の宗教の基盤である先祖供養の墓地、すなわち仏教の跡地が累々と連っているのであった。黒瀬はクロスの転化ともいわれるが、「辻」の名も興味深い。辻は現世と来世との境界を意味するからである。⁽²⁾

ガスパル様、黒瀬の辻は、先祖供養と墓、海の彼方と現世、天上と地上が、「島」の言葉を中心にマンダラ状に広がってゆく心的空間であった。日本人の宗教意識はどのような心の輪郭として顕現していくか。殉教の「島」はこの問題に深く楔を打ち込んでいる。そんな思いを抱きながら、共同研究者である小嶋善行教授とともに丘をくだった。⁽³⁾

2 根獅子の殉教

生月島とならび殉教の地とされる場所が根獅子(ねしこ)である。平戸桟橋から志々伎行バスに乗りこむ。バスの車窓右手に見上げる形で、美しい紐差カトリック天主堂がある。そして、根獅子道バス停で下車。あたりは田が広がり、振り返ると遠くに市民病院の白い建物が見える。道は二又に分かれ、ゆるやかな坂道を登ってゆく。からすうりが陽にかがやき、人家の陰から並んだ犬がこちらを見ている。ときおり、農家の小型トラックがわれわれのそばを走り去ってゆく。小一時間も登ったころであろうか。眼下に、不意に青い浪のうち寄せる白浜が見えてくる。根獅子の浜である。

根獅子は切支丹の史蹟が点在する。

ニコバ（雨乞いの行事）、ニコバは根獅子の南の方角にある雑木の茂った山で、昔から殉教者の遺跡として霊地とされており、死者を葬るときには頭をニコバのほうに向けて埋葬する習慣がある。ニコバには平たい大きな石があり、町民はタタリを恐れて足を踏み入れない。⁽⁴⁾

上記の資料は平戸市切支丹資料館の方から見せてもらったものである。資料館のすぐ傍には「オロクニン様」（ウシワキ森）がある。伝承の内容は「ある夫婦と女の子三姉妹の前に、一人の男の子が現れた。家族はその働きぶりに感心、長女の婿に迎えた。子をなし、もう大丈夫と思って一家がキリシタンと告白した翌日にその男は姿を消し、キリシタン取締りの役人に、一家は捕らえられてしまった。一家は両親はじめ、長女のお腹の子を含め六人が（おろくにん様）、根獅子の浜の昇天石で処刑された。遺体は海に捨てられたが、村人達は遺体を拾い、この森に手厚く埋葬、一帯を千人塚と称し聖地として敬った。旧暦8月26日が命日（信者伝承）、と先の「マップ」に記す。

この伝承にはいくつかの注目してよい記述がある。第1は、家族からキリシタンだと打ちあけられた男が密告者であったことである。それは徳川幕府による一連の弾圧の中のひとつである「訴人褒賞」（密告の奨励）政策と合致する。密告という制度が家族の絆を切り裂いてゆく様子を伝承はなまなましく伝えている。

第2の点はキリシタン家族が海辺の石、昇天石と称される場所で処刑されていることである。殉教の地として波打ちぎわから10メートルほどの場所が選ばれ、石の上で処刑されている。海を臨む場所、石が聖地とされることは、日本の神道の聖地と重層している。前号の『静岡英和学院大学紀要』⁽⁵⁾に記述したように、日本神話『古事記』のイザナミの命はカグツチを産み、熊野の「花の窟」（ハナノイワヤ）という、海を真近に臨む場所に祀られているのであった。石が各地の神社の本体として祭られ、神の依代としての磐座（イワクラ）を考えると、海を臨む岩が「昇天石」として伝承、記憶されることの意味は浅くない。

第3に「遺体」がウシワキの森に埋葬された、との点である。遺体という表現の仕方が適切であるかの疑問は残るものの、殉教者が森に埋葬された点が注意されよう。乾いた砂地の砂漠ではなく、日本人の聖地である熊野⁽⁶⁾に象徴される森が「遺体」の葬り処として選ばれていることである。平戸市切支丹資料館の方の説明によれば、自分が子供のころはうっそうとした森であり、近年切り払われ、随分森は明かくなった。かつては裸足でウシワキの森には入ったとのことである。熊野、伊勢に代表される神の森と岩に、隠れキリシタンの部落根獅子は重層するかのように見える。

第4は殉教の昇天石を300メートル程進む浜の先に、八幡神社がある点だ。訪れた時（平成20年10月27日）は人影はなかったけれども、小さな祠の前に吊るしてある赤と白の幣帛は色あざやかなものであった。日本全国に無限分割を重ねていく八幡神が、聖地昇天石から距離を隔てない所に鎮座しているのである。

根獅子の、昇天石を中心として、石や森が死者を祀る場所として「聖地」となっていることは、日本人の宗教意識の原基に触れてくる問題を提示している。

シマ、海、石、森は、日本人の宗教意識に深く関わる問題である。そのことをキリシタンとして殉教した人びと、その聖地は現代に投げかけている。教条としてでなく、肉体の消滅を堵して、家族とともに信仰を証しする姿勢は、現代における宗教への関わり方と重層している。そして、今も「平戸」は、日本人の信仰のあり方を問い続ける場所としてある。信仰とシマ、死と再生が過去のもの、記憶の底に忘れられるものではないこと、遺産に封印されるものでもないことを、平戸の「自然」は現代まで証明している。

3 万葉集と平家物語

肉体が減んだあと、靈魂はどうなるのか。それはキリスト教、仏教、イスラム教、ヒンドゥー教などの宗派を越えた人類的課題である。『万葉集』巻1に次のような和歌がある。

一書に曰く、近江天皇の聖躰^{にはか}不予、御病急なる時に、大后の奉獻^{たてまつ}御歌一首
148青旗の木幡の上を通ふとは目には見れどもただに逢はぬかも⁽⁷⁾

天智天皇が危篤になられたときに、倭姫王が詠んだ一首である。重い病にかかり、肉体は消耗しているものの、死には至っていない。しかし、天皇霊が木幡山の上を行き来しているのが目にはつきりと見えるのに、直接逢うことができないと歌う。和歌は靈魂を目に見えるものとして捕らえ、にもかかわらず逢うことはないという。肉体と魂は分離し、見ることと逢うこととは別との意識が一首を貫いている。肉体と靈魂はそれぞれ別の位置にあるのが病いの時だと、万葉和歌はいう。霧となり、川藻となって靈魂は自然の中に浮遊している。それが万葉びとの靈魂観である。

病む肉体、消耗する身体はどのように死を迎えるのか、その先には何があるのか。

次に島を舞台とする身体の消耗を描く『平家物語』を引く。京都市左京区にある俊寛僧都の山荘で平家打倒の密議がなされる（巻第1、鹿谷）。しかし、それは参加者の一人であった多田蔵人行綱の「密告」によって平清盛の知るところとなる。西光法師の斬殺をはじめとして大納言成親の家族離散の物語は「密告」を端緒として展開してゆく。親しい仲間の振りをしながら、密告によって家族の離散と処刑が開始されてゆく。

権力に逆う者たちの追放、排除の場所として鹿谷密議の三人は鬼界が嶋に流される。

彼嶋は、都を出てはるばると浪路をしのいで^い行所也。おぼろけにては舟もかよはず、嶋にも人まれなり。をのづから人はあれども、此土^{このど}の人にも似ず。色黒うして牛のごとし。身には頻^{しきり}に毛おひつゝ、云詞^{いふことば}も聞しらず。男は烏帽子もせず。女は髪もさげざりけり。衣裳なければ人にも似ず。食する物もなければ、只殺生^{ただ}をのみ先とす。しづが山田を返さねば、米穀^{けんばく}のるいもなく、園の桑をとらざれば、絹帛^{けんぱく}のたぐひもなかりけり。嶋のなかにはたかき山あり。

鎮^{とこしなへ}に火もゆ。硫黄^{いおう}と云物^{いふ}みちみてり。かるがゆへに硫黄が嶋とも名付けたり。いかづちつ

ねになりあがり、なりくんだり、麓には雨しげし。一日片時、人の命たえてあるべき様もなし。

(巻第2・「大納言死去」)⁽⁸⁾

鬼界が嶋は都から遙か遠い場所として描かれている。そこは舟の往来がないこと、住む人は稀で、肌黒く、体を毛が覆う〈異人〉のシマである。さらに言葉が通じないこと、男は烏帽子を着けず、女は髪を下げず、衣装もないことで、鬼界が嶋は距離の遠さだけでなく、都とは生活、風儀をまったく異にする異境であった。いわば衣、食、住の異なる地であり、その基盤が消失していることで、自分の存在すら消滅しかねない場所である。「一日片時、人の命たえてあるべき様もなし」と物語は記す。都から追放された人々に宗教的思いが兆すのはいつか。

康頼はながされける時、周防室^{すほうむろ}づみにて出家して(ン)げれば、法名は性照^{しやうせう}とこそついたりけれ。出家はもとよりの望なりければ

つみにかくそむきはてける世間^{よのなか}をとく捨^{すて}ざりしことぞくやしき

丹波少将・康頼入道は、もとより熊野信じの人々なれば、「いかにもして此嶋のうちに熊野の三所権現を勧請し奉て、帰洛の事をいのり申さばや」と云に、俊寛僧都は天性不信第一の人にて、是を用いず、二人はおなじ心に、もし熊野に似たる所やあると、嶋のうちに尋ねまはるに、

(巻第2・康頼祝詞)

宗教的決意である出家に康頼を駆りたてたものは流謫であった。都から遠方に流離することが彼を出家に向かわせる。彼の和歌は、出家した現在から、早く出家しなかった後悔の念で彩られている。

鬼界が嶋の流人の「祈り」とは何か。都への帰洛である。出家して世の中を完全に背いたと、和歌で告白しながら成経、康頼の祈りは、現世の都に帰ることを祈る矛盾に満ちた行為であった。来世は二人には見えていない。二人は島の中に熊野に似ている場所を求め、名を付け、参詣する。現世利益の実践である。一方、一連の「宗教的行為」に与しなかった人物が俊寛僧都である。両者は信心を持つ人と持たない人とに明確に書き分けられている。出家した康頼たちは現世の都に還ることを祈り、僧都俊寛は「天性不信第一の人」として、両者は奇妙にねじられている。ここに熊野勸進聖の姿を見ることはできようが、僧都俊寛の不信の人との規定は物語の結構をみる上で注意されてよい。熊野信心の二人はやがて帰洛を果たすが、熊野への祈りの気持を実践に移さなかった俊寛は、鬼界が嶋で絶命するからである。信心を持たない者は命を絶たれる。それも他者からの拷問でなく、荒廃した島にとり残され、一人になることで死は整えられてゆくのである。

しかし、天性不信の人俊寛は、都で身近に仕えた有王によってのちに最期を看取られるのである。医師も宗教者もない「休息の家」で最期を迎える。平家物語は死にゆく俊寛の最期をつぶさに描写している(巻第3・僧都死去)。現世利益を願い、祈る者が都に還り、「天性不信第一の人」が物語の中で死に至る道行きが丁寧になぞられてゆく仕儀は、祈らぬ人、不信の人が鬼界が嶋説話の終わりをなす人、死にゆく人の最期を語る平家物語の主題に深く交差している点で見のがしがたい。祈らない人は救われないのか、あるいはもっともよく最期を描写され、有王によって記憶され、物語の輪郭を型どることで救われたのか。祈りのことばと不信の人との差異は、救いの主題を考える

基軸であろう。

注

- (1)『日本キリスト教歴史大事典』667頁、教文館
- (2)宮崎賢太郎氏『カクレキリシタン・オラシヨ一魂の通奏低音』52頁・長崎新聞新書・2008年6月
- (3)生月島の現地調査地は皆川達夫氏『オラシヨ紀行』・日本基督教団出版局・1981年3月、田中澄江氏『キリシタン迫害の跡をたずねて』中央出版、片岡弥吉氏『日本キリシタン殉教史』時事通信社、1979年、『キリシタン史実と美術』淡交社、県別シリーズ42『郷土資料事典 長崎県観光と旅』人文社、『長崎県の地名』平凡社、『キリスト教大事典』教文館、『新キリスト教辞典』いのちのこ
とば社などを参考にした。第2章の根獅子も同様である。
- (4)「根獅子地区切支丹史跡マップ」平戸市切支丹資料館発行
- (5)野本寛一氏『神と自然の景観論』講談社学術文庫、久保田展弘氏『日本の聖地』講談社学術文庫
- (6)五来重氏『熊野詣・三山信仰と文化』講談社学術文庫
- (7)伊藤博氏校注『万葉集』上巻
- (8)岩波日本古典文学大系『平家物語』上

(大洋和俊)